

フリーター選択プロセスにおける移動志向と地元志向

ー現在志向・「やりたいこと」志向の再解釈ー

新谷 周平（東京大学大学院）

1. 現在志向・「やりたいこと」志向と本研究の目的

フリーターの増加には、労働市場要因とは別に若年者の意識要因が挙げられるが、それについて先行研究は、彼らの現在志向あるいは「やりたいこと」志向を繰り返し指摘してきた（耳塚ほか 2000、日本労働研究機構 2000、荻谷ほか 2003）。その上で、「若年期の職業キャリア形成上の重要性を意識させること」、「この時期の職業能力形成の重要性を認識させること」、「正確な職業情報の提供と相談機会の充実」（小杉 2003）などの対応策が提起されている。つまり、フリーター選択者の意識に働きかけ、将来のことを考えてそのための準備をさせようとするものである。確かに、非正規雇用の若者が増加しており、しかもその増加や正規雇用への移行の条件が、家庭的背景や性別によって規定されているとしたら何らかの政策的対応は必要だろう（小杉 2003、143 頁）。

これらの政策的対応の前提には、「意識を高めれば進路決定ができる」、「フリーターは不利である」という 2 つの仮定があると考えられるが、それでは、なぜ現在志向、「やりたいこと」志向を通して、一見不利と思われる選択をするのだろうか。意識を高めれば、フリーター以外の進路を選択していくのだろうか。このことが理解できなければ、有効な政策的対応を提起することはできないであろう。

この問いについて報告者は、若者集団への参与観察に基づき、フリーターを選択するプロセスにおける若者集団の文化の介在を明らかにした（新谷 2002）。そこでは中卒または高卒後フリーターとなる若者たちが、「地元」と呼ばれる人間関係を維持するために、またその関係があるからこそ、フリーターを選択し、その状態を維持していることがわかった。しかし、フリーターとなる若者は、そこで指摘された「地元つながり文化」を共有する若者だけではない。

それゆえ本研究では、「地元つながり」をもたない学校ランクの高い若者のフリーター選択プロセスを見ることによって、地元志向に還元されないフリーター選択・維持要因を明らかにし、フリーター選択者の意識の特徴とされる現在志向、「やりたいこと」志向の内実を明らかにする

ことを目的とする。

2. インフォーマントの属性と移動性

インフォーマントは、学校ランクの高い私立進学校を卒業後フリーターとなった黒木とイズミである（表 1）。彼らは、同級生のほぼ全員が四年制大学に進学する中であえてフリーターという進路を選択している。報告者は、彼らが高校生ときから、それぞれ 3 年半ないし 4 年の間、ストリートやクラブでの参与観察および複数回のインタビューを行った。

対象者	性別	年齢 ※	中学校	進路	
				中学卒業後	18 歳以後
黒木	男	21	国立	私立進学校	フリーター
イズミ	女	20	私立進学校	（中高一貫）	フリーター
タツヤ	男	21	公立	公立普通科下位校	フリーター
織田	男	21	公立	中華料理屋 →フリーター	フリーター →整体師

表 1

※2003 年 4 月 1 日現在

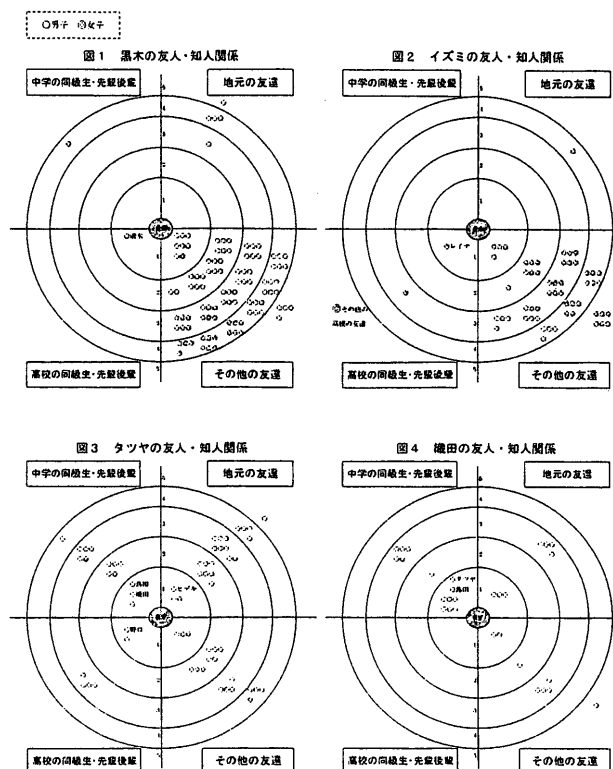
地元つながり文化として描いたタツヤ、織田と比較すると、彼らの友人・知人関係が、中学時代やその他の地元の人間関係を中心としていないことは明らかである（図 1～4）。それだけでなく、彼らは高校時代の友人さえも避けて、地元を離れた卒業後の人間関係（「その他の友達」）を中心としてフリーターを続けているのである。これを地元志向のフリーターに対して移動志向のフリーターであるとする、彼らのフリーター選択・維持のプロセスにはどのような特徴が見られるだろうか。

3. フリーター選択プロセス

黒木は、高校時代に「チャラチャラ遊んでた」生活から抜け出すためにダンスをはじめ、「何の目的もなく大学行って、みんなが就職するから就職する」同級生への反発から高校卒業後フリーターとなった。

彼は、ダンスでの成功をあきらめ、フリーターの経験から学歴がないことの不利を感じると、卒業後 2 年目の終わり頃には大学進学、正社員就職を目指す。ところが 4 年目には再び DJ やダンスをしながらフリーターをするという生活に戻っている。

イズミは、中高の頃は、英語を生かしたキャ



リアウーマンを目指していたというが、ダンスへの興味が高まると、大学に行く意味を問いなおし、フリーターを選択している。卒業後1年目は、ダンスに打ちこみ、プロのダンサーを目指していたが、2年目には、ダンス観の変化等からダンスの練習頻度が格段に落ちている。だが、そのとき彼女は、大学進学やキャリアウーマンを目指すことはなく、むしろ恋愛・結婚に自らの選択を傾けたのである。

確かに、彼らの選択プロセスを見ていくと、進路展望を短期間のうちに変更しており、将来を見据えた意識的な選択をしていないように見える。そのことを現在志向ととらえ、意識を高めることを対策として提起することもあながち間違いとは言えないかもしれない。

しかし、それではなぜ、黒木は一度フリーターや高卒学歴の不利を知りながら、再びフリーターを選択・維持しているのだろうか。なぜイズミは、ダンスでの成功見込みを縮減したのち、かつて目指したキャリアウーマンの道を選択しないのだろうか。

4. 友人・知人関係とフリーター維持要因

これらの問いに答えるためには、選択プロセスにおける精神状態や自己認識の変化、それに及ぼす友人関係の影響に焦点をあてる必要がある。ここで、再び黒木・イズミの友人関係(図1、2)の内容を深く分析する(当日の発表)。

5. 分析 フリーター選択プロセスにおける

道具的機能と表出的機能一

以上のようにフリーター選択プロセスにおける特徴を見ていくと、このプロセスのなかに、進学や就職以外の進路選択をした場合における、学校外の場の二つの機能を見出すことができる。その一つは、何らかの目的をもちながら、生活手段を得ることを可能にする機能であり、もう一つは、そこで情緒的に安定を図っていくことを可能にする機能である。ここでは、パーソンズ(1964)の用語に習って、前者を「道具的機能(instrumental function)」、後者を「表出的機能(expressive function)」と呼ぶことにする。

この2つの概念によって、移動志向、地元志向それぞれのフリーター選択プロセスを分析すると、これまでの研究が現在志向と呼んできたものは、表出性が確保されない状況下で、さしあたり自分のいる場、所属する集団の確保を優先する志向性だと解することができる。また、「やりたいこと」志向と呼ばれる志向性は、一方で、表出性を志向しながら、その先に道具性をも考えていることをとりあえず外部に示す表現として理解することができる。

これまでの研究は、道具性の観点を中心としたデータの解釈にもとづき政策提言を導き出してきた。しかし、実際のプロセスは、それだけでなく表出性の確保と結びついて行われている側面が強い。現在、学校とは異なる職業への移行を支援する政策が実行に移されつつある。それらは、学校からの移行が主流ではなくなる中で重要であるが、それらを有効なものとするためには、若年者の表出性への配慮が伴わなければならないだろう。

主要参考文献

- 新谷周平 2002「ストリートダンスからフリーターへ」『教育社会学研究』第71集
- 荻谷剛彦ほか 2003「大都市圏高校生の進路意識と行動」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第42巻
- 小杉礼子 2003『フリーターという生き方』勁草書房
- 耳塚寛明ほか 2000『高卒無業者の教育社会学的研究』科学研究費補助金報告書
- 日本労働研究機構編 2000『フリーターの意識と実態』No.136
- パーソンズ, T. 1964/1985『社会構造とパーソナリティ』(武田良三監訳) 新泉社